

大学生の学習集団づくりと対話

—教師を目指す学生が「対話」をすることの意義—

福田 八 重*

Dialogue and Learning Group Education at University: An Analysis of Educational Practices in Teacher Training Course

FUKUDA Yae*

Abstract

Dialogue is important for the growth and the development of children. Therefore, it is also important for students in teacher training course to have opportunities to practice dialogue, and to belong to learning groups of dialogue-oriented. The author practiced the dialogue-oriented classes in teacher training course at university. The aim of this paper is to analyze the meaning of dialogue and learning groups of dialogue-oriented.

キーワード : 対話, 学習集団, 生徒指導, 教職課程, 授業実践

Keywords : Dialogue, Learning group education, Student guidance, Teacher training course, Educational practice

はじめに

ケアは「人間の自然なあり方」であると考えられている。そして、そのもともとの意味は「心配する」「好きである」「気にかける」など、他者に気持ちを寄せて、共感をすることが語源とされる。

私たち人間がケアを必要とすることに関しては、「人間の体の構造の制約」¹⁾という生物学的な観点でも捉えられる。「人間の胎児の頭は頸管口を通る大きさでなければならない。」ゆえに、「脳の成長と発達の大部分は出産後、子宮外の安全な場所」²⁾で行わざるを得なく、人間は「他の種には先例のない無力で虚弱な期間が長くなることを余儀なくされた。」³⁾そのため、その虚弱さに対する対応が、人間が種として生きられるかにとって重要な事

項となったのである。

人間はそもそも「弱さ」を持って生まれてくる。生物の中では、ゆっくりとした発達をする人間にとって、「弱さ」の存在は必然であり、人間として生存するために、ケアされていく。人間は、子どもから大人へと心身が育まれる過程で、ケアし、ケアされる存在であるのだ。そして、大人となってからも、ケアし、されることで、人間として生存し続けることが可能になる。生きものとしての脆弱さは、その生涯においてケアし合う関係を生じさせ、他者とともにあるという豊かさを人間にもたらしてきた。

そして、ケアし合う関係を持ち、他者とともにあるためには、他者に気持ちを寄せ、他者を理解する必要があるし、自分のことも理解してもらって、気持ちを寄せてもらう必要もある。そこには、応答関係がある。

* 工学部人間科学系非常勤講師, 帝京大学教職センター Part-time Lecturer, Department of Humanities, Social and Health Sciences, School of Engineering

そのため、「対話」は人間にとって必須の行為となった。なぜなら、対話は、お互いの相違を、言葉での応答にもとづいて、理解し合うことだからである。ケアと集団づくりという観点に立った時、「対話」は、ケアをしながら、集団づくりに寄与していく営みであると考ええる。

「対話」は、子どもたち一人一人の発達や成長、および、集団づくりにおいて大切な位置付けとなる。ゆえに、教師は、子どもたちの発達や成長、また、子どもたちの発達や成長が保障される集団づくりを願って、子どもたちの「発話する場」「対話する場」をつくっていく。このような実践を教師がおこなうことを可能にするためには、教師自身が、教員養成の過程で「発話する場」「対話する場」を体験し、自身の発達や成長、また、発達や成長が保障される学習集団づくりに関与した経験を有していることが重要であると考ええる。

本論文では、教職課程の学生を対象とした「対話」を意識的に取り入れた授業実践を通して、大学生の学習集団づくりにおける「対話」の意義や、教師を目指す学生が「対話」をすることの意義について考察したい。

1. 授業実践の対象とした学生

現在、福田は帝京科学大学千住キャンパス（東京都足立区）の生命環境学部、中高教員養成課程の学生の教育を担当している。生命環境学部には生命科学科、自然環境学科、アニマルサイエンス学科の学生が所属し、中学高等学校理科の教員免許が取得できる。

授業実践をおこなった学生は上記の学部学科所属の2年生29名である。学生たちにとって福田は、4年間「教職課程の先生」として、授業のみならず、各種ガイダンス、進路指導、相談等で関わる専任の教員となり、教職課程のクラス担任のような位置づけで関わっていくこととなる。

本学の生命環境学部教職課程の学生の特徴として、安心して自分らしくいられる人間関係や集団を強く希求していることがあげられる。また、その要求を教員や共に学ぶ仲間にも見える形で表出していることも特徴である。ゆえに、他者への共感性も

強い。過去に人間関係で挫折経験がある学生も多いが、それを前向きに越えていきたいと願っていることも、特徴として挙げられる。

そのため、安心して自分らしくいられる人間関係や集団づくりに寄与するワークショップや「対話」を用いた授業にも積極的に参加してくれる傾向にある。

2. 授業実践の目的と経緯

本実践は大学2年生を対象とした。彼ら、彼女らとは1年次「安心して発言できる集団づくり」を目標とし、相互の意見表明権を保障することを意識化しながら、実践を行ってきた。これは、上記の要求に根ざしており、さらに教員になって集団づくりを行なう際、意識化して実践すべきことでもある。そのため、自分たちが、自身の集団づくりに関与する体験を通して、「安心して発言できる集団づくり」を実感し、集団をつくる力量をつけていってほしいと考えたためである。

2年次にあがり、継続して担当は福田であるが、同じ教員からの学びであっても、昨年より「学びが深まった」と感じてもらえるような授業を行いたいと考えた。また、担当教員は同じでも、授業で扱う実践記録や論文を通して、福田以外の大人との出会いをしてほしいということも考え、授業を実施した。

対象となったのは、2年生、前期の授業「生徒指導・進路指導論」である。

同授業では、各回の授業で、「何を学ぶのか」「なぜそれを学ぶのか」について学生と共有すること、「教員免許取得者として、学習集団としての成熟過程を経験すること、そして、「授業を通して『対話』に対して自分なりの見解を持つ。」ということを実践の柱とし、授業を行った。

さらに、「大学の教職課程において、『発話する場』『対話する場』を学生が体験できるような『対話のしかけ』をつくる授業を繰り返し行うことで、教師を目指していく学生が、『対話』をすることの意義や、学習集団の成熟を経験することの意義について一緒に考察していきたい」という旨を伝え、教員学生ともに実践を通して、研究していくという目的を共有した上で授業をスタートさせた。

3. 授業を通して学生が「対話」をどう捉えたか

第3章では、対象となった授業の内、3回の授業について、学生たちが「対話」をどのように捉えていたのか、分析を行う。

(1)授業テーマ「子どもたちの発達段階に応じた『発話する場』を仕掛ける」—第4回授業—

「対話」が成立するためには、「発話」がなくてはならない。子どもたちにとって、「発話」が可能になるには、発達段階に応じた、「発話する場」が必要となる。子どもたちが発話しやすい状況をつくり、対話を生んでいくにはどうしたら良いのか。

第4回授業では、「子どもたちの発達段階に応じた、『発話する場』を仕掛けていく」実践を体験することをテーマとした。

授業では、実際に子どもたちが「発話」し、「対話」することをうながす実践として、「歌に主人公がいるとしたらという設定でストーリーをつくる」という実践を行った。

授業の流れは下記の通りである。

授業の流れ

①THE BLUE HEARTS の「TRAIN TRAIN」
「ひとにやさしく」2曲のうち好きな歌を選んで、「その歌に主人公がいるとしたら」という設定でストーリーをつくりましょう。

②ストーリーが完成したら、お互いのストーリーを見せ合い、おしゃべりしましょう。

(自分のストーリーの説明をしたり、仲間のストーリーに対して質問をしたりしてみましょう。)

③最後に仲間のストーリーを見せてもらった感想を書きましょう。

上記の内容を数人のグループに分かれて実施をした。各グループで代表的な作品を選び、後輩に引き継ぐことも決定した。

本実践では、授業の流れ②の箇所で対話を行ったが、対話後の感想として、以下のようなものがあった。

①「同じ曲でもみんなの思い描くストーリーは、全くちがったので、不思議だと思いました。歌のパワーとは、こういう所にあるのだなと感じました。自らが落ち込んだ時、歌で助けられるのは、こんな風に自分でストーリーを描くからなんだなと知る

ことができました。みんなの書いたストーリーに感動しました。中には小説になりそうなものもありました！」

②「自分の考えとまったく異なる意見があり、『あっこんな考え方もあったか!』と思い、そこから話の輪が広がるのが楽しかったです。自分の作品を口で説明してくれる子もいて、読むだけでは読みとることができないことも知れたので、自分の作品について語るのは必要だと思いました。」

③「わたしたちのグループでは、『トレイントレイン』を選んだ人が多かった。それ自体もびっくりしたが、途中の話は違えど、ゴールはみんな前向きな気持ちに変化して終わっていたのにとってもびっくりした。(中略)歌詞に添って物語をつくるということは難しく、時間が足りないと感じた。また今度やる機会があれば、納得のいく作品をつくりたい。」

学生の感想からうかがえるのは、同じ題材でも違う発想が生じること、その違いを味わうのは楽しいということ、お互いの違う発想について対話することは「話の輪が広がること」、これらについて、授業を通して実感していることが分かる。

実際の学校現場においても、互いの相違点を肯定的に受け止められる力量形成を目的とし、授業の中で互いの相違点(今回は各自のストーリー)について、楽しみながら深めていく授業が行われている。(2)テーマ「綿屋りさ『蹴りたい背中』で思春期を理解する」—第5・6・7回の授業—

第5・6・7回の授業では、綿屋りさ『蹴りたい背中』⁴⁾を題材に、「綿屋りさ『蹴りたい背中』で思春期を理解する」というテーマで授業を行った。

『蹴りたい背中』は、高校1年生のハツが主人公である。恋愛小説として読むこともできるが、主人公が、自己や他者をどう捉えていけばいいのか葛藤する場面も多く、主人公の気持ちを考えながら、学生自身が自分の思春期を振り返ることができる点で思春期の子どもを考察することができる教材である。

他者との関わりを閉じ、他者のことはもちろん、自身に対しても、その当事者でないかのように分析ばかりしてきた主人公。そんな主人公が他者を希求し、さらに自己に対する当事者性があるからこそ生

じる「感情」が溢れていく場面。授業では、それが描かれた場면을対象に、テーマ設定をした上で「抜き書きコメント」を作成し、「対話」を行った。

設定したテーマと授業の流れは、下記の通りである。

授業の流れ

①授業の目的の共有：なぜこの授業をするの？

②黙読（味わう）69頁5行目～88頁2行目まで

各グループに分かれたら、まず、自分の意見を整理するために、本文を丁寧に黙読しましょう。気になったところに線を引いたり、ちょっとしたコメントを書き入れながら、読み進めていっていきましょう。

③テーマ発表（設定したテーマ）

『蹴りたい背中』の中で多くの要素を占めているのが、「分析」です。「他人」のことも「自分自身」のことも「分析」するハツ。しかし、この場面でのラストでは、ハツの感情があふれだします。ハツの中で何かが変わりつつある。その伏線(例えば：ハツの願いや心の揺らぎが感じられる部分など)となる箇所を抜き出し、コメントをつけてください。

④コメントの付け方～抜き書きコメント～

テーマに沿って、本文から（１）抜き書きをし、（２）、（１）について１行以上のコメントを書く。なぜ、そこを選んだのか、どのように感じたかなど、詳しく書いてください。（１）～（２）の作業を自分なりに整理しながら、B4の紙に書き入れてみよう。（１）～（２）の条件が整っていれば、レイアウトは自由です。

⑤グループ作業

自分の意見が整理できたら、グループでテーマに沿って、意見交換をし、深めてください。お互いに、なぜ自分がそこを「抜き書き」したのかや、「抜き書き」した部分につけたコメントなどをグループで出し合ってみましょう。また、自分のつけたコメントが、自分自身の経験や自分自身が過ごした学校生活で感じたことにもとづいている場合、そのことも合わせて、友達に教えてあげてください。

⑥今日の授業の感想

⑦まとめ

授業では、数人のグループになり、⑤の方法で「対話」を行った。

ここで、「対話」をした後の学生たちの感想を紹介する。感想を書くときに設定した問は以下の二つである。「①対話をする中で、『思春期理解』や『子ども理解』『人間理解』に関して深まった部分を教えてください。」「②上記を踏まえて、授業で各自がテーマに取り組み、『対話』することの意義（意味）は何であると思いましたか。」

①について、2名の学生の意見を紹介する。

①「『思春期の子どもが発する言葉のチョイスからその子の思っていることをのぞくことができる』ということ。○あんまり感情を入れ込みすぎると、その子と同じことに悩んだり、違うことにイライラするので、他人の見えているものを教えてもらうことで広い視点を持てる。そこから本人への理解へつながることができると思った。」

②「『思春期だけでなく、人は『さみしさ』にはとっても弱い生き物だと思った。その中でも思春期にはその感情が強く出てくるし、そのさみしさの対処の仕方が分からない時期だと思いました。だからハツは、自分という中に閉じこもってしまうし、もう一人の内側にいる自分とも戦っていると思った。思春期は頭の中の自分と心の自分とのすれ違いの時期だと思った。』」

②については、以下のような意見があった。

③「私は正直、この『蹴りたい背中』についての“対話”をするのは嫌だなと思っていました。自分の意見が的外れだったらどうしようと正しい答えはなんだろうと探してしまっていました。ですが、今回“対話”をやり、答えなんてないんだなと気づきました。対話により自分の意見を発表することによって、うなずいて、共感してくれる人がある。自分の意見に少し自信がついたような、発表してもいいんだなと思いました。このように“対話”することの意義は、自分がまだ気づいてない自分に、他の人の意見を聴くことによって、気づくためにするのではないかと思いました。」

④「対話することで、他の人が同じ文章を読んで感じるものが様々であると身を持って感じた。また、自分が抜き出した所が、他の人も抜き出している、やはりみんな気になる所だったのだなと思うことができた。文章の理解が深まったし、自分の抜き出しに付してくれる形で発表してくれる

事もあったので、思っていたけれど言葉・文章にすることができなかったものを友達が出してくれてスッキリする所もあった。逆に、自分が全く気にしなかった事を抜き出している子もいて、その子のコメントを聞いて、なるほどなと思う事も多かった。違う学科の子達とチームを組んだので、今まで関わらなかった子とも関わり合いを持ててよかった。(後略)

⑤「ハツ一人のことは見ているという同じことをしていても、一人一人こんなに考え方が異なっていると感ずることができた。対話する中で新しい表現だったり、共感、気がつけることがとても多いなと感じた。そういったものは他人からしたら当たり前な事なのかもしれないけど、聞いている側は、とても大切にできる、勉強になる事なのだと思います。対話の意義は他の人の知恵を知ったり、考えたり、参考にしてできることだと思った。」

⑥「『共感』してもらうことに意味があると感じた。自分が考え、抜き出した部分にうんうんとうなずいてもらったり、『私もここ抜き出した!』と同じ考えを対話を通じて共有することで、この小説とは少し違うかもしれないが、『認めてもらいたい』という気持ちが少しはみたされていくのではないかなと思う。対話で自己肯定感が味わえるのでは?」

最初の間、①については、「子どもが発する言葉のチョイスからその子の思っていることをのぞくことができる」という意見から、子どもの言葉の背景にその子どもの思いがあることに気づいたことがわかる。また、「感情を入れ込みすぎると、その子と同じことに悩んだり、違うことにイライラする」の記述からは、教師も人間であり、感情的にならないのではなく、人間としてさまざまな感情持つ、そんな一人間が教師として子どもと接していくことに気付く場面となっている。さらに、「他人の見えているものを教えてもらうことで広い視点を持てる。そこから本人への理解へつながることができる。」との記述があるが、ここからは、教師が同僚や研究サークル等で、複眼の視点を持って子どもを分析することが子ども理解につながっていることを理解する場面となっていると考える。

2 人目の学生の意見では、自我の芽生えの中で、そでまで自分が描いていた自己像と、他者の目を介

して見えてきた自己像も含めて、価値づけられていく過程で生じる感情の狭間といった思春期特有の悩みが、「対話」を通して見えてきたことが伺える。

続いての間②の記述からは、「対話」には、「共感」が存在することへの気づきがあることが分かる。これは、学生たちが「対話」を通して、「共感」が必要要件であると感じ、「対話」の場面で実行したとともとえられる。

「自分がまだ気づいてない自分に、他の人の意見を聴くことによって、気づくためにする」という言葉にあるように、「対話」に、他者の意見を通して自己の新たな面と出会うと言う働きがあるということも、学生たちが感じていることが伺える。また、「他人からしたら当たり前な事なのかもしれないけど、聞いている側は、とても大切にできる、勉強になる事」「対話の意義は他の人の知恵を知ったり、考えたり、参考にしてできることだ」の言葉にあるように、「対話」における自分の意見表明は、実は他者の利益となること、そして、他者の「知恵」を知り、参考にし、考えるきっかけと捉えていることが明らかとなった。

(3)テーマ『いじめ問題』を考える―第 15 回の授業―

ここから、最終回である第 15 回の授業の学生の意見を紹介する。

以前、本学の授業でゲスト講師をして下さった北村年子さんが、学生達と言葉を交わし、北村さんの講座を受けての学生からの手紙を読んだ後、「福田さん、学生に自分をきちんと開いて接してあげなくてはいけないよ。」とおっしゃった。学生たちの中には、生育史の中で傷ついた経験がある学生が多くいる。そんな学生と接する時、私自身が学生に自分を開いて接していくことが、学生たちの傷つきからの回復や自己への信頼を獲得することにつながる、そのような意味であったと思う。

ゆえに、本年度の前期授業の最終回では、いじめられ経験があり、その後、いじめを研究する生き方を選んだ福田の生育史も含めた形で、いじめを考察する資料を扱った。

いじめの研究を始めて間もなかった大学院生当時、1996 年から 2 年間、福田は「いじめについて語る会」という、子どもから大人まで、様々な市民

に参加してもらって、いじめについて考え語り合うことを目的とした、会の運営に携わる世話人をしていった。運営には、学生・院生・大学の教員・小中高等学校の教師・父母・医師といった様々な人が携わっていた。例会が2カ月に一度のペースで開かれ、30人～50人ほどの参加者があり、みなでいじめについて考え、その解決に向けてはもちろん、学校教育の在り方も含め、議論が重ねられていた。

ある時、世話人の子育て中の母親から提案があった。「1994年にいじめを受けて自殺をし、亡くなった大河内清輝君の命日が近い。もしかしたら、今、いじめを受けて苦しみ、自殺をしようと思っている子どももいるかもしれない。その子どもに何とか届くようなメッセージをつくれないうか」

この提案を受け、福田を含めた学生、院生4名で、話し合いを重ねた。そして、詩を作ることが好きであった福田が、メッセージとして詩の形にまとめた。

当日の授業は、上記メッセージと、メッセージ発表の折、福田の生育史も含めて取材下さった中日新聞の記事を使用した。⁵⁾

「対話」をするときのテーマは、次の通りである。「印象に残ったこと・私がみんなに話したくなったこと。」そして、「対話」後、「みんなが話したことを聞いて私が思ったこと」というテーマで、意見を書いてもらった。学生からの意見は以下の通りである。

①『『あなたはあなたの味方でいてあげて』(注 福田：福田作成のメッセージの一節)という所で、Tさん(原文では実名。以下同様。)が、自分のことを信じられなければ、何も信じられないというのが、たしかになと思いました。福田先生のメッセージから、いじめられていたからこそ分かる心理がというか思うことがあるのだと Kさんの意見を聞いて思いました。Yさんの意見から、身近にある友達を一度見つめ直してほしいという言葉があり、やっぱり身近すぎて気付かないこともあると思うので、広い視野で皆をみることも大切だけど、一番近くで自分のことを見てくれている人のことを考えなくてはいけないと感じました。」

②「Yさんの体験(注 福田：上記Yさんと同じ。)、エピソードを聞いて、中学に入ったとき、生徒会などに参加したりと、中心人物な存在になった

と聞いて、きっと最高の友達に出会うことができたのではないかと思います。いじめを受け、それ乗り越えることができた人は、誰よりも友人を大切にし、思いを伝える強さを持っているのかなと思いました。私も、もう一度、自分の身の回りの友人との関係性・絆を見つめ直し、よりよい仲になればいいなと思いました。」

③「TKさんの意見で、自分を大切に思ってくれる子が今いなくても、焦るのではなく、長く探すことは大切だと言っていて、本当に、その時に決めてしまうのではなく、長く見ることは大切だなと思いました。Yさんの話(注 福田：上記Yさんと同じ。)で、自分の体験で、中学に入ると自分を受け入れてくれる友達に出会えたという体験談がきけてよかったと思ったのと、やはり、その時の現場(クラス)の状況にいと、狭い世界で自分の居場所を考えがちですが、その時、その場所で出会えないだけで、きっと自分を受け入れてくれる人がいるという事を改めて考えさせられました。」

最終回を迎えて、顕著になったのは、「他者」がたくさん感想に登場することだ。

本授業は一貫して「対話」について考えることを教員と学生と一緒に意識しながら授業を進めてきた。授業の前半部第4回までは、「対話」によって様々な考えを知ることの「楽しさ」を知り、中盤、5回目の授業以降で、「対話」によって他者を通じて自分の考えが深まること、自己との出会い直しができること、他者との出会い直しが生まれることを学生が見出し出していった。そして、自分の意見表明も他者のそれに寄与することを学んだ。

ゆえに、終盤の授業では、自分の意見表明をすることを大切に、他者の言葉を意識化しながら、「対話」が行われていったように思う。そのことで、最終回の感想には、他者の名前と言葉が多く挙がった。そして、Yさんが多く登場したのは、みんなのなかでいつも優しく笑っていたり、楽しく過ごしている現在のYさんが、小学生時には辛さを抱えていたことがあったこと、しかし、中学校以降の他者との出会いで、自信が持てるようになり、リーダーになっていたこと、これら、Yさんとの出会い直しが学生たちにとって大きなものであったことが伺える。また、それが同世代のYさん自身の口から語られた

ことで、自分の人生と重ね合わせて生き方を考えたり、Yさんや自分の人生を捉え直すことで、子ども理解への深まりもあったのではないかと考える。

期末テストにあたる最終レポートでは、学生に、第1章「対話とは何か」第2章「子どもにとっての対話の意義」第3章「教職課程の授業で学生が対話をする意義」という章立てで論文を作成することで、「対話」について総括をすべく、考察してもらった。

本章のまとめとして、最終レポートの第1章「対話とは何か」について書かれた学生の意見を紹介する。「対話とは自分の内側で考えたこと、感じたこと、思ったことを表に出す場であると考えます。自分の中で考え、感じるだけではそこから何も広がっていきません。自分の考えをみんなに知ってもらい、みんなの考えを自分が聞いてそこからまた考えることは、対話をしなければ得られないことだと思います。自分とは違う考えがあるという事を理解することで、より良い人間関係もつくっていきけるのではないかと思います。また、考えを言葉に出していく事により、自分の考えをまた考え直せるチャンスが生まれると思っています。対話の中でも自分の考えが変わっていく事もその人の中では成長と捉える事もできます。対話とは、お互いの意見を交換し合い、お互いのことをよく知ることができるひとつの方法ではないかと考えます。」

4. 「子どもにとっての対話の意義」を学生がどう捉えたか

前章に続いて、最終レポートでの学生の意見を紹介する。まず、第2章「子どもにとっての対話の意義」についての記述を紹介する。

①「対話をすることによって、人の気持ちを表情や仕草からも感じられる。(中略) 感じられるのではなく、感じようとしているのではないと思う。相手が目の前にいると、人間は知らず知らずのうちに表情や仕草、声のトーンなどから相手の気持ちを分析してしまうものだと思う。(中略) 子供はまず対話をたくさんすることで円滑なコミュニケーションをとる練習ができると思う。」

②「子どもにとって、対話はスキンシップのひとつ

つであると考えます。対話をすることによって自分の意志を伝える事ができ、相手の意思も知ることができます。また、対話の中で新しい言葉や単語を覚える事もできます。文字では伝わらない、イントネーションの違いも聞き取り、感じ取ることもできます。『これはどう思う?』の一言でも、相手が疑問に思っているのか、確信を持っているのか、または、ただ聞いて欲しくて言っているのかという捉え方がたくさんあります。この捉え方の違いを小さな頃から対話を通じて養っていくことでこれからの人生の人間関係を上手くすることができます。」

もう一つ、子どもが対話をする意義として、達成感が挙げられると思います。相手に自分の気持ちが伝わったという達成感です。この達成感が子どもの頃にあるか、ないかは今後重要になっていくと思います。なかなか対話ができず、自分の殻の中にもこもってしまった子どもは、どうせ対話をしても自分の気持ちは伝わらない、それなら話をする必要がないと思ってしまい、最後には自分の苦しい気持ちを表に出せずにおとなになってしまおうと考えられます。しかし、子どもの頃に上手く自分の気持ちを伝えられる、という経験が少しでもあれば、話してみれば解決するかもしれない、自分の気持ちをわかってくれるかもしれないという希望を抱ける大人になっていくと思います。」

③「小学生、中学生、高校生にとって、決まった環境の中でいかに気持ちよく日々を過ごしていくかが大切になってきます。そこで自分の存在意義を確立するために対話が重要になってきます。(中略) 自分の存在意義を確立するためには、自分という人間を理解してもらう必要があります、そこで対話を用います。ただし、子ども同士が対話をする上で注意しなければいけないことが、価値観が違うという理由で、仲間はずれやいじめが起きる可能性があることです。(中略) そこで重要になるのが互いを尊重し合うということです。子ども達にただ対話をさせて、意見を言い合うのではなく、大前提として、一人一人を尊重し合うことが大切だという事を子ども達に伝えておくことが大切です。また、子どもが対話をする時に大切になるのが雰囲気作りです。(中略) 自分の意見を尊重して聞いてくれるという話しや

すい雰囲気が大事になります。私が教師になった時に一番大切にしたいなということは、生徒一人一人が尊重し合い言いたいことを言えるような教室にしたいです。」

学生たちの意見にもとづくと、「対話」には、「スキップ、および、感情の交流がある」ということがまず挙げられる。「対話」をすることで他者の感情を感じ取ろうとする意思を持てるようになることも含まれるとしている。そして、「対話」を通して「相手に自分の気持ちが伝わったという達成感」や「自分という人間を理解してもらう」経験を持つことができ、そのことが、「話してみれば解決するかもしれない、自分の気持ちをわかってくれるかもしれないという希望を抱ける大人になっていく」ことにつながり、そのことが子どもの成長や発達に意義があると考えていることが理解できる。

そして、学級づくりの上での「対話」の成立要件として、「自分の意見を尊重して聞いてくれるという話しやすい雰囲気が大事」とであると分析している。

5.「教職課程の授業で学生が対話をする意義」を学生がどう捉えたか

「対話」は、子どもたち一人一人の発達や成長、および、集団づくりにおいて大切な位置付けとなる。教師は、子どもたちの発達や成長、また、子どもたちの発達や成長が保障される集団づくりを願って、子どもたちの「発話する場」「対話する場」をつくっていく。

ただし、「対話」を通して、ケアし合うことができ、要求が立ちあがってくる自治的集団づくりを実現しようと「子どもたちの中からつくられるクラスにしたい」⁶⁾と考えた時、教師は、「丁寧な作業と結構な苦勞」⁷⁾が必要となる。子どもたちとの「対話」を通して、「子どもたちの中につくられているものを学ぶ」⁸⁾ことから始め、彼ら彼女らの生き方を一緒に探していく必要があるからだ。

このような実践を教師がおこなうことを可能にするためには、教師自身が、教員養成の過程で「発話する場」「対話する場」を体験し、自身の発達や成長、また、発達や成長が保障される学習集団づくりに参加した経験を有していることが重要である

と考える。

最終レポート第3章での「教職課程の授業で学生が対話をする意義」というテーマでの学生の記述から考察を行う。

最初に紹介する学生はレポートの「はじめに」のところで、以下のような記述を行っている。

①「私は、この授業を受けるとき、福田先生に対話を中心に行うと言われて衝撃的だったのを覚えている。対人関係が得意でない私は中学の時に大きな失敗をしているからである。同じ失敗をしたくないのは当然だと思う。毎回の授業を受けるたびに、変な事言わないようにしようという緊張と不安があった。しかし回数を重ねにつれ、対話に慣れる事ができた。安心感も増えるのと同時に後悔の念に押しつぶされそうだった。以下の章は、私が後悔をしてもしきれない思いを元に対話の意義・意味とは何かを述べたものである。」

以下が彼女の第3章の記述である。

「自分の意見をぶつけ合う『議論』は理系の人が結構好むと思うが、『対話』となるとどうしたらよいか分からなくなる。私だけかもしれないが、コミュニケーションが下手な人にとって対話と言われると少し厳しいものがあるように感じた。しかし、いざ始まってみると、色んな人の意見が聞けてなるほど、そんな考えもあるのだと思い、とても勉強になった。(中略)教育相談の授業で何かクラス内で問題が起こった時、一人で抱え込まないと勉強していたのだが、私のように他の先生とコミュニケーションが取れないと一人で抱え込んでしまうかもしれないと思った。

私は、中学生や高校生の時と比べて「発話する場」や「対話する場」が減った。つまり、他の人に自身の気持ちを話す力が弱くなっていると感じる。自身がそれを感じたのは最終回の授業だ。福田先生がどんな気持ちであのすばらしい記事を書いたかすごく伝わった。私は30人近く大勢の中で中学の時の苦しい思いを話すことは出来ない。一番は己の弱さかもしれないが、対話するといった経験が今までないことによる。教師を目指す私達にとって、「対話する場」というのは貴重だった。私は考えの視野が広がるということは、その考えを受け入れ、自身の世界を広げ成長すると考えている。そのため、教師

学生が『対話』をすることは、将来自分の教える生徒に対して『対話』を使って進める授業をする際に、実際にそれを教師になる学生自ら体験しないと、実際に教師になった時に教えられないからである。また、『対話』をすることにより『対話』をすることの大切さなどを身をもって体験し、考え、『対話』は話す内容がその時々違うので新しい発見をする。

人は一人では生きていけないというように、確かに人の周りには、人が作ったもの、人が発明したもの、その他にもたくさんのもの・ことがあり、私たちは今その歴史を背負って生きているわけで、今までの歴史がなければ私たちはここに存在していない。このことからわかるように、人は人に支えられて生きている。人が生きるには人が必要である。人間の間にはコミュニケーションとして『対話』があり、その『対話』は、人間が生きていく世界の中では重要なものとなる。自分の言ったことが相手に共感してもらえる。そのことをきっかけにして自分に自信ができ、自分を信じ信頼してくれた相手に対して、その相手を信じることができる。自分を信じられなければ、相手も信頼できないのだ。『対話』とは、自分の意見を話し、自分というものはっきりと形作り、相手の意見を聞き発見をする。教師という仕事は人に教える仕事。生徒に自分の今まで経験を話す機会もあると思う。その前の段階として、自分というものを再確認するために、または表現するために、『対話』をするのではないだろうか。

⑦「私は教職課程の授業で対話をする意義は、幸せになることだと思います。勿論子供たちに対話する力をつけるためには自分でそれができなければいけません。しかし、授業で対話を重ね、今までの自分になかった考えを発見したり、またそれを取り入れたり、自分と同じ意見の人とさらに話の内容を深めたりすることは、子どもたちにそのことを教えられるようになるためという使命といったものではなく、自分の世界が広がっていくことを実感できる貴重な機会であるように思います。その経験はきっと自分の糧となり、将来のそして今の自分を幸せにしていくことだと思います。」

学生と「対話」を柱に授業をし、「教職課程の授業で学生が対話をする意義」について意見表明してもらい、見えてきたものは、「対話」をすることに

よって「学び」「成長」「幸福」の相互作用が生じるということである。

③の学生が「対話」そのものが「授業資料」となつたと述べた。「対話」における意見表明そのものが「学び」になるということである。これは、⑤の学生の意見や⑥の学生の「発見をする」という言葉にも表れている。また、③の学生の意見が「対話が授業資料となる」と気づいたことから、話す内容やテーマが変わっても、継続していく「対話」という営み全体から発見できることもあるということができる。

また、⑦の学生の「世界が広がっていく」、①の学生の「考えの視野が広がるということは」「自身の世界を広げ成長すると考えている」という言葉からは、学びの深まりを通じて自己の成長を実感できることがわかる。⑥の学生の意見からは、自分の意見表明が「学び」を深めることに寄与し、自己や他者への洞察を深めていくことを実感することで、「自分に自信ができ」という成長が「対話」に存在することが、見い出せる。

さらに、自分に自信ができること、さらに、自分の世界が広がって、経験が糧となることは、⑦の学生が述べるように、「将来のそして今の自分を幸せにしていくこと」だと考える。

「対話」をすること、また、「対話」が可能となる集団をみんなでつくっていくことは、「授業を通じて精神的自由の空間を押し広げていく」⁹⁾ことではないだろうか。そして、「対話」を授業の中で継続していくことによって、「学び」「成長」「幸福」の相互作用が生じるのではないだろうか。

そして、教師になっていく私たちという将来像を描いた時、④の学生が言うように意見表明に苦手意識を持っている自分が意見表明できるようになったこと、また、相互に意見表明できる集団づくりに自分も含め参加した経験を持ったことが意味を持ってくるのではないだろうか。

学生たちは、「対話」に付随するものとして「共感」という言葉を何度も書いた。ここでの「共感」は、他者の意見表明に対して、近しい意見も異なる意見も自分の考えや世界をひろげてくれるものとして肯定的に受け止め、さらに自分の考えを深めるきっかけとしていく営みなのではないだろうか。

最後に、学生が述べるように、教師が「一人で抱え込まないで」ということは、大切なことである。

しかし、①の学生が述べてくれたように、「クラス内で問題が起こった時、一人で抱え込まないと勉強していたのだが、私のように他の先生とコミュニケーションが取れないと一人で抱え込んでしまうかもしれない」と思いながら、一人で抱え込まない方策が見えず、苦しむ教師もいると考える。

学生の意見から学べたことは「一人で抱え込まないこと、それが子どもの利益になる」とただ言うのではなく、では、困った時、問題が起きたとき、どのように同僚に語りはじめ、「対話」を行っていかばいいのか、そこから取り組む必要があるということである。

そして、②の学生の記述にあったように「周りの人と協力して、分析したり、解決策をいくつか出す、ということを自分から積極的にできるようにするため」にも、大学の教職課程の授業で「対話」をすることは大切なことではないだろうか。

おわりに

『子どもの参加の権利』のなかで田代高章は、「子どもの自己決定は、決して子どものわがままな利己的主張の貫徹を意味するのではなく、他者との関係性の中で、自己の意見・考えを調整しながら、自己の主体的判断に基づいて決定を下すことを意味する。その点で子どもの自己決定は、他者との調整の機会をもっとも要求される共同決定という場面をくぐりぬけることにより、より質の高い自己決定が可能となるとともに、それら自己決定と共同決定の相互作用を可能にする媒介項として、『参加』が位置づくともいえる。」¹⁰⁾とし、同書でW・クラフキの自己決定の概念を紹介している。クラフキは自己決定を「自己決定とは、個人的な事柄、人間的関係及び信念を、自己の洞察、判断に基づいて決断できる能力。」¹¹⁾と規定している。

ところが、現代の子どもたちは、自己の主体的判断の権利を有することそのものへの認識を持ってないなか、傷ついて無力化していたり、自分自身のことや家族・友達・人生といった世界を「どう捉え、引き受け、付き合うか」において多くの子どもたち

が、混乱している現状がある。

それゆえ、ケアの観点を持った心的外傷からの回復の過程を経ることと、同等の行為が学級づくりにおいても必要となってきた。

心的外傷からの回復に関わっては、J.L.ハーマンは、心的外傷からの回復の過程は3段階であるとし、その段階は「安全・服喪追悼・再結合」¹²⁾であると述べている。

安全は、「心身ともに攻撃をされることがなく、安心できる環境に身を置く。そして、安心できる環境で『安全』が安定して継続することを経験し、自分らしさを持つ権利があることに気付ける状態。」があることである。

そして、「服喪追悼」は、傷つきが自分の人生の中のひとつの出来事として、捉えられるようになることである。これは、自分自身のことを自分自身の感じ方で認識し、言語化し、自分が、自分自身の主体となって人生を生きることを自覚することでもある。そして、自分自身の主体となって人生を生きることができる私と私が出会い、自分自身の主体となることは、たとえ傷つき体験の「服喪追悼」を経てのものであっても、「希望」となる。

そして、再結合は、取り戻した「自分らしい私」として、「生きてみること」であり、続いていく人生を「生きていくこと」である。

現代の子どもたちとの学級づくりにおいては、これらのケアの観点を念頭に入れ、ケアし合う関係を構築し、子どもたちが安心して学級でともにあることができるために、教師と子ども、子どもと子どもが「対話」をすることが大切となる。「対話」を通して、意見表明の権利が自分にあることに気づき、ケアし合える集団をつくることに参加することは、自分たちの発達や学び、学校や地域、社会のあり方に対する要求が立ちあがってくることにつながり、自治的集団が立ちあがってくることにもつながるのではないだろうか。

大学生は、教育を追究する上では共同研究者ともいべき存在なのだと考える。働きかけるものが働きかけられるというのが、今回はまさにそうであった。人前で意見表明をすることは苦手だという学生も多くいた。しかし、「対話」を通して、意見表明し合うことの意味を考えたり、たとえ意見表明が苦手

な仲間がいたとしても、「安心して発言できる集団をつくることに参加して、それを可能にしていってみよう」といった学びを深めたいという一心で「対話」をし、「対話」について一緒に考えてくれた。今回の「対話」の授業は、「自分と世界の間をつくりかえる」¹³⁾ 萌芽だと考える。

【注】

1) 2) 3) キャロル・レップナン・モンゴメリー、神郡博・濱畑章子訳

『ケアリングの理論と実践—コミュニケーションによる癒し』医学書院、1995年、14頁。

4) 綿谷りさ『蹴りたい背中』河出書房、2003年。

5) 新聞記事は、中日新聞 1996年11月25日「教育レポート96 欄」に掲載。(福田作成のメッセージ「今 いじめで苦しんでいるあなたへ」の掲載と福田へのインタビュー記事にて構成。) メッセージ全文は、下記の通りである。

いじめられた経験を持つ私が 今 いじめで苦しんでいるあなたにどうしても伝えたくて このメッセージをつくりました。
「今 いじめで苦しんでいるあなたへ」

「いじめについて語る会」 福田八重(愛知教育大学大学院) あてのない未来を信じるためではなく、未来をつくる力を持つために 私たちの言葉に耳を傾けて下さい。

ずっと起きていたらかならず空が薄紫色になって

朝が来たのに

そして新しい一日が始まったのに

もう何日も何日も

朝が来なくて

苦しんでいるあなたに

この言葉を伝えたい

あなたがもし今 いじめられていて

毎日毎日「だめだ だめだ いなくなれ」といわれていたとしても

あなたは絶対悪くない それを心に刻んでいて

あなたが いじめられているその世界

たとえばあなたのいるクラス

そこだけが あなたの生きることができる世界だと思わないで

もし そう見えていても

そうとしか思えなくても

疑ってみて 違う居場所を探してみても

少し 楽に生きられるから

あなたにもし 友だちがいなくても

恥ずかしい事じゃない

あなたに価値がないんじゃない

あなたのよさを見つけれられるひとが

すぐ 近くにいないだけ

ずっと付き合える友達に

あなたを大切にしてくれる友達に

逢える時期(とき)はみんなちがう

逢える場所もみんな違う

あなたは この世にたった一人

たくさんの偶然と

たくさんの必然が重なって

何時間も頑張っても やっとこの世に生まれてきた

もし すごく苦しくて

心がどんどん混乱して

自分の価値が

生きている意味が

少しも 少しも わからなくなったとしても

最後まで あなたはあなたの味方でいてあげて

一人で頑張ること

自分で乗り越えようとする事

その心意気は最高

でも

自分一人では出口が見えなくなったときは

かならず誰かに相談して

誰もわかってくれないかも

そう思う前に

もう一度試してみても

私たちは「いじめについて語る会」を開いています。

おじいさんもおばあさんも

お父さんもお母さんも

おじさんもおばさんも

お兄さんもお姉さんも

そして 子どもたちも

みんな 心の中にある苦しみや痛みを

語り合っても

少しずつ元気になっていきます

あなたも一度のぞいてみてください

みんなあなたの話を聞くために待っているし

あなたの相談相手が見つかるかもしれない

一度試しにのぞきにきて

一人で考えるより

一人で苦しむより

みんなで考えたほうが

大きな力になるから

大きな一歩を踏み出せるから

6) 7) 8) 加納昌美「女子の関係を解きほぐす」雑誌『教育』2015年5月号、26頁～34頁。

9) 竹内常一『学校の条件—学校を参加と学習と自治の場に』青木書店、1994年、272頁。

10) 喜多明人・坪井由実・林量俤・増山均編『子どもの参加の権利』三省堂、1996年、29頁。

11) W.クラフキ、小笠原道雄編『教育・人間性・民主主義』玉川大学出版部、1992年、122頁。

12) J.L.ハーマン、中井久夫訳『心的外傷と回復』みすず書房、1996年。

13) 竹内常一「自分と世界の関係をつくり変える学び」『高校生生活指導』2008年夏号、青木書店。